巻頭言

実践に入ったロジスティクス

早稲田大学アジア太平洋研究センター教授（郵政研究所特別研究官）　高橋　輝男

朝夕の通勤電車の混みようは今日でも相当なものである。うっかりしていると溢れて乗り遅れてしまうことさえある。目の前のドアをしっかり見据えて、タイミングよく自分を押し込む、それでも車内からかなりの抵抗に出合うことがある。このような時、よく次のようなアナウンスがある。

「本日、電車大変込み合っております。前後の空いているドアからお乗り下さい。」

云われて前後のドアに目をやり、そこが空いていれば移動する。当然のことである。もし前後のドアに目をやらなければ遮二無二目前のドアにだけ集中することになるであろう。

他から情報を集めることで私達は思考の領域を広げることができる。それが習慣になればより広い領域の行動をルール化してシステムとする。このようにして情報の力をえてシステムは成長していく。

かつて日本は生産システムの高度化を熱心に進めてきた。それが成熟化してきたとき、図らずも情報化の進展により周辺の、つまり調達や物的流通、使用支援、廃棄／回収といったシステムから様々な情報を獲得することができるようになってきた。すると全体を視野におさめてシステム化すべきだという方向へとシステムが成長を始める。地球環境が悪化しつつあるという情報が入れば、それを考慮に入れて行動をとるようシステム化が進む。

ビジネスロジスティクスとは調達から生産、物的流通、使用支援、廃棄／回収にいたる物の流れ全体を視野に入れてのシステム化努力である。それは伝統的な企業という枠を越えて波のように具体化しつつある。

書籍が出版社で作られ、取次店を通して書店に配本されるという流れ全体について、書店の売り上げ情報をPOSで取次店、出版社が共有化し、返本を最少に押えながら、短いリードタイムで注文に応えていくシステム構築が動いている。しかし、ロジスティクスはさらに従来の企業という制約を越えて進む。インターネットによる本の注

文と宅配便による配本。衛星を利用した電子書籍の可能性、絶版の書籍を追加製作するシステムなど新しい情報提供業を目指した試みがあり、取次とか書店とう制約を越えて実験が次々と進んでいる。

日用雑貨品、食品の世界も動いている。メーカで準備された製品を従来はメーカや卸が店舗にメーカごとベンダーごとに納入していた。しかし、これでは受け入れる方がたまらない。何度もメーカの配達車が到着するごとに立ち会わなければならないからである。そこで途中にセンターを設けて、メーカごとの製品をカテゴリーごと店舗別に集約して配達しようということになった。この仕事は輸送業が担当したり、卸売業や変身したメーカが担当したりする。ロジスティクスの貴重なキーワード“共同化の実現”としての一括物流である。

小規模な小さな生産システムの開発がビールやパンの製造で進み、流通の中に生産システムが融け込み、流通と生産の区別が難かしくなり、統合化が進んでいる。統合化とは単に結びつくというだけではなく、旧いシステムの枠組みが消えて境界が区別し難くなる状態をいう。

ビジネスロジスティクスにからんで公共のパブリックロジスティクスがある。これも部分最適から全体最適を狙って視野を広げていくことになる。一貫バレチゼーション計画、港湾や郵便システムの開発もここに含まれる。

以上はビジネスの場合はもちろん物の流れを軸に計画を進めるロジスティクスであるが、最近、人が入力されて快適に目的を達成した人がアウトプットされるシステムが注目されてきた。レストランやホテル、旅行、教育などのシステムである。これらはサービスロジスティクスと位置づけられる。郵政に関連する様々なシステムにおいても、従来の物を扱うビジネスロジスティクスという場にサービスロジスティクスの方法を持ち込む工夫がこれからは重視されるようになると思われる。